

3.断層の存在と広がり

当初公開していた資料の中では断層の存在を「ごく限られた分布を示す」と限定的に記述しているが、地形に見られるケルンコル（尾根の括れ、急激な高低差など脆弱な地質の存在により差別侵食された鞍部地形（俗称では“盗人みち”））が随所に存在し、ルートマップの特徴と場内踏査の結果から、断層そのものである事が明らかになった。

公開資料4－10は、採掘跡の岩盤の岩級区分を示しており、碎石に使用されたと考えられる岩盤は「CH級」であり、その中に帯状に碎石場全体に分布する「CM～CL～D級」の岩盤が分布して記載されている。この帯状の岩盤はCH級に比較して相対的に亀裂頻度が高く、中にはCL～D級のように土砂状の岩盤まで含まれている。

断層には「破碎帯を伴う断層」と「破碎帯を伴わない断層」があるが、当該地に分布する前者のものが優勢で、その岩相は場内外の確認から「砂礫状～粘土混じり砂礫状～粘土状」である。

北側の上段から最下段の斜面に分布する断層は、湧水を伴っている事から「水みち」にもなっている。採石場敷地の境界付近で国土研が確認した写真 Ph3.1 と 3.2 に断層の岩相を示す。岩級区分では土砂状の D 級の断層であり、ルートマップの公開資料においても同様な評価がされているが、断層との記載が無く調査報告書自体が「断層の存在を隠した恣意的な内容」と指摘されても仕方がない。



Ph3.1 北側斜面に見られる断層破碎帯



Ph3.2 北側斜面に見られる断層破碎帯を構成する粘土化帯

Ph3.3 は西側斜面の尾根付近に見られる西側傾斜の断層で幅は 1m 以内であり、公開資料（図 4-9）では CL 級の岩盤区分がされている。



Ph3.3 西側斜面に見られる断層破碎帯

Ph3.4 は南西側斜面で見られる高角傾斜の断層であり、反対側が谷部にあたり、公開資料（図 4-9）では CL 級の岩盤区分がされている。



Ph3.4 南西側斜面に見られる断層

この岩級の低い帯状の岩盤の分布は北側尾根から谷筋に延びており、公開資料で示されている岩級の低い岩盤の分布は、明らかに断層そのものと判断される。

断層の形成は、溶結凝灰岩の堆積後あるいは内外の花崗岩の貫入後のいずれかと推察され、敷地内の貫入岩の分布を切っており、その脈岩のズレはルートマップ資料から約 40m と判断される。

過去に何回となく動いた履歴があった事を示しており、CH～CM 岩盤の節理面の開口やセン断面の存在の営力になっていたものであり、この断層運動は場内だけに収まるような狭い運動ではなく場外へも波及した運動ととらえる事が自然である。

断層が処分場予定地内外の広範囲に分布しており、CH級の岩盤と比較してCL～D級の断層の工学的性・特に変形性が大きく、産廃を埋め立てた場合に不同沈下が予想され、結果的には不同沈下により遮水シートの破損が懸念される。

断層破碎帯が「水みち」になっていると同時に CH～CM 岩盤の節理面やセン断面も開口している事から汚染水が場外へ漏出する可能性は非常に高いものと推察される。